

## ここまでの物語:

デイジーの人生において、本はいつだって一番重要なものだった。若い頃から恐怖の物語を読み始めた彼女は、エドガー・アラン・ポーやストーカーの「ドラキュラ」等をぞくぞくしながら楽しんだ。彼女がフィクションの世界に求めていたのは、人生において忌み嫌っていた物 — 怪物や恐怖や暴力の世界だった。

そしてある日、彼女はジョン・ディー版の「ネクロノミコン」と出会った。それは実際禍々しい物だった。冒涇で、不道徳で、そのひどさは現実とは思えない程だ。フランケンシュタインも「大鴉」も頭から消えてしまった。デイジーの背に震えが走ったのは、禁忌の喜びに目覚めたからではない。彼女の心に、これまでありえなかった恐怖が生まれたのだ。

その後、さらに本は — 「妖蛆の秘密」や「屍食教典儀」と — 増えていった。どれも輪をかけて邪悪なものだ。彼女は半ばパニックに陥りながらすべてを読んだ。こんなことが現実にあるの？ ここで語られていることは真実なの？

そして今、彼女はそれを確信している。「ポナペ経典」を読んでいるときに、図書館に現れた“何か”。その“何か”が現実なら、彼女が読んできたすべてが現実ということになる……だとしたら、それを止める方法を知っているのはデイジーだけだ。

## ここまでの物語:

チャーリー・ケインはアーカムの住人の安全な未来を公約としていた。彼は様々な公約を行った — 減税、教育の改善、犯罪の減少などだ。それが彼の仕事なのだ。彼は選挙に当選するためにそれを公約にしていたし、当選してからは住人の助けとなるような行動に取り掛かっていた。時には誇りに思えないようなことすら行ったが、チャーリーはいつだってより良い結果のために働いていた。一番大切なのは住人だ。

チャーリー・ケインが報告を聞き始めたときも、彼の頭には住人が一番にあった。もちろん、彼は誰にも語ることは無い — 都市の行政の様々な部署からの報告から想定される、ぞっとするようなアーカムの未来の光景など、どうして公開できようか？ ある意味、誰も彼を信じてなどくれないだろう。だが一方で、広まりつつあるパニックが公共の利益となるだろうか？

チャーリーはいつでも町とつながりを持っていた。彼は報告をまとめ上げると、ミスカトニック大学のグラント教授の元まで足を運ぶことにした。

しかし、グラント教授の血が飛び散った部屋で、グラント教授の惨殺死体を目の前にしたチャーリー・ケインには、自信の欠片すらも生まれはしなかった。

### ここまでの物語:

ローラはアーカム精神病院のドアから、明るい陽の光の下へと歩き出した。最後のショーの後、療養所での回復のことを考えると、これは正しい行動だったのだろう。もちろん、今でもあの芝居のことは思い出したくない — あの奇妙な詠唱と薄気味悪い仮面のことは。それは今でも彼女の悪夢に蘇ってくる。

彼女は手の中の新聞の切抜きに目を落とした。「有名舞台監督、首つり自殺！」この記事を見たとき、彼女は精神病院を出る決心をした。あの芝居には、彼女の馬鹿げた想像を超えた何かがあることに気づいたのだ。

ローラは隠し持ったデリンジャーを手で確認し、結末のエンドロールがどうなるかを知るために、再びステージの真ん中へと進んでいった。

### ここまでの物語:

リリー・チェンの子供の頃は、控えめに言っても奇妙なものだ。彼女が中国本土で産声を上げた翌日、何人かの僧が彼女の家を訪れ、ここに昨晚生まれた子供はいないかと尋ねた。僧は預言の子を探していた、その子が女性であったことに驚きを隠せなかったが、彼女を僧院で引き取り修行させてくれるよう頼み込んだ。貧しく敬虔だった両親は、彼女の面倒を十分見てくれることを確認した後、それに同意することになった。

僧は彼女が歩けるようになるかならないかの頃から厳格な修行を課し、彼女に知りうる限りのあらゆる格闘技を教え、必要とあらば他国から師を招くことすらあった。彼女は来るべき危険な任務に立ち向かう宿命にあることを若い頃から理解していたので、その修行には本気で挑んだ。リリーは数々の素手による戦いの技だけでなく、精神と肉体を根本からつなげ合い、互いに助け合うことを学んでいった。

そして先月、その時が訪れた。一人の僧が、叫び声を上げて瞑想から目覚めたのだ。「大いなる目が開きつつある！ 終末の時が来るのだ！」彼は声を上げると、そのまま倒れて息絶えた。

今、リリーはアーカムの魔術店の中で、運命を成就する助けとなる何かを待っている。

## ここまでの物語:

リトアニアでレックスの手相を見ていたジプシーの女性は、彼の顔に向かって叫び声を上げると、骨ばった鉤爪のような指をつきつけながら、一つの言葉を何度も何度も吐き出した。

「呪われてる、だそうで」と通訳は肩をすくめると、手を合わせて精霊を追い払う仕草をした。

その旅の続きもろくなことにはならなかった。彼が見つけた、地元のカルトの秘密の儀式の詳細を記した日記はどこかに行ってしまったが、彼はこんなことには慣れっこだ。実際、ここ数年の間に彼が見つけたは無くしてしまった数多くの証拠のおかげで、彼は本気で呪われているのかもしれないと思い始めていたぐらいだ。インスマスでの仕事のときの写真は海風に吹き飛ばされてしまった。ダンウィッチで見つけた足跡は、彼が保安官を連れてくる直前の雨で流されてしまった。何度も何度も、何かろくでもないことが起こるのが常だ。

アーカム・アドバタイザー紙のオフィスを出たレックスは、ため息をつきながら自分のひげをなでた。今回は、真実に至るまで何者にも自分を止めさせはしないつもりだ。

## ここまでの物語:

ルークが幻夢境を知ったのは何年も前だ。浅き眠りの七十段の階段を降り、ナシュトとカマン=タの審判を受け、眠りの扉を抜けてさらなる世界へと彼は歩を進めた。

ルークはそこで大いなる冒険をし、毎夜の眠りの中でそこへと戻っては、彼が見つけたこの奇妙で素晴らしい地を探検していった。やがて彼は、訪れたこの地や話した生物の更に深い謎を求め始めた。少しずつ秘密に近づいていくうちに、彼は大いなる真実を見つけた — 幻夢境は現実であり、彼は物理的にそこに移動することができるのだということに。

ルークは即座に行動に移った。目覚めの世界の面倒を片付けてしまうと、彼は叔父が残した謎の箱を組み立て、自らが見つけた門をくぐり抜けた。永遠に戻らないつもりで。

しかし、幻夢境の黄金の野原で彼が耳にした言葉は、大いなる邪悪が目覚めつつあり、現実の世界に危機が訪れているというものだった。ルークは再び身の回りの品を集め、アーカムに戻って旧き邪悪を倒すための手助けに向かった。壮麗なる幻夢境に比べれば、ニューイングランドは退屈で田舎くさい所かもしれない。だが、そこはやはり彼にとっての故郷なのだ。

## ここまでの物語:

ウェンディが小さいころ、彼女がネックレスで遊んでいるのをママはとがめなかった。星の中に目が描かれた奇妙なデザインは、彼女の一番古い記憶だ。それからママは彼女にお話を聞かせてくれた。ウェンディはネックレスを回しながら、そのきらめきを眺めていた。

その後、彼女の父が海で行方不明になったとの知らせが届いてから、ママはおかしな行動を見せるようになった。彼女は奇妙なシンボルを家中にチョークで描き、異様で不快な本を読み始めた。結局、ウェンディの先生の一人が懸念を募らせた結果、ママは精神病院送りになり、ウェンディは孤児院に入れられた。連れられて行く直前、ママは彼女にあのネックレスをくれた。「必ず身につけておくのよ、ウェンディ。私が守って上げられない間、それが守ってくれるから。ママはいつだってあなたを愛しているわ」

ウェンディは孤児院に数年いたが、州に任せるよりも自分のことは自分で面倒みるほうがうまくいくと決心した彼女は、結局そこを逃げ出した。

そして今、ウェンディは銀行の前で、気づかないうちにコーヒーカップに入れられていた写真を見つめている — 彼女の父親の写真だ。その裏には、さらに謎めいたメッセージがあった。「もうすぐ赤い潮が満ちる。身を守るんだよ、おちびさん」

顔を上げたウェンディは、その身体にここ数年無かった感情 — 希望が満ちるのを感じていた。

## ここまでの物語:

トニーは自分が殺したのが何なのかを知らなかったが、危うくそいつに腕を肩からもぎ取られるところだったのは確かだ。今でも彼は、水際に来ると動悸を抑えられないでいる。

そいつは少なくとも人間の形は取っていたが、その全身が忌まわしい鱗と粘液で覆われていて、まるで深海に棲む恐ろしい生き物のようだった。海を数マイル離れたそれは、彼の足跡を嗅ぎ付けると川に力を貸すことにしたらしい。その汚らしい臭いは、塩水と腐った魚、そして病的な飢えを満たすために殺した家畜の血の混じった臭いだった。

それが川に飛び込んだとき、そのまま放っておけば良かったのかもしれない。しかし、彼はこれまでも賞金首を逃がしたことは無く、これを最初にするつもりも無かった。彼はナイフを引き抜くとその後を追った。そこから先は、血しぶきと叫ぶ怪物と泥水の中にまぎれていった。

三日後、彼は病院で目を覚ました。逃がした獲物に対する恐怖と怒りの入り混じった感情に、彼は独り言を呟きながら身を震わせた。

二週間後、医者は彼が完全に回復したと言ってくれた。もう退院してまた稼ぎに戻るに十分なレベルだ。しかし今回、彼の獲物が人間ではないのだけは確かなことだ。